

探究的な学習は内発的動機づけを高めるのだろうか？

池田利基 (筑波大学大学院)

キーワード：探究的な学習，学習動機，内発的動機づけ

問題と目的

「総合的な探究の時間」が告示され、今後高校教育は「主体的・対話的で深い学び」を目指すことになる(文部科学省, 2018)。しかしながら、日本では実践・政策がどのような意味を持つのかまっとうに実証されないまま「改革」が繰り返されてきた(松岡, 2019)。全国的に本カリキュラムが展開されるに際して、それがどのような構成概念に影響を与えるのかは確認されるべきである。

これまでの探究活動に関する研究は、理科教育(久坂ら, 2015; 伊藤, 2016)、教科学力(楠見, 2018)に関連したものがある。他にも、探究活動が生徒の自律性を推奨するものであることを考慮すると、これは自律的な学習動機づけに影響を与えるかもしれない。そこで、本発表では、県立高等学校が取り組んでいる探究活動を紹介するとともに、探究活動が生徒たちの学習動機づけに与える影響を一部報告する。

方 法

調査対象者および調査時期 卒業生のほぼ全員が大学へ進学をする県立進学校に通う高校生の2年生160名を調査対象者とした。当校の1年生は全クラスが校内で探究活動をおこなう。2年生は一部のクラスが、近隣の諸研究機関に所属する研究者や大学院生、そして高等学校教員の教鞭の下で探究活動を実施する。本研究では、2年生の時に探究活動を実施するクラスを介入群、実施しないクラスを対照群とみなした。当該活動の終了直後である2020年2月に、学校教員による配布・回収によって質問紙を実施した(不等価2群事後デザイン)。有効回答者数は、144名であった。

探究活動の概要 当校の探究活動では、文系ゼミと理系ゼミに大別される。ゼミごとに高等学校教員及び大学院生1名ずつが配置され授業が運営された。生徒が各々作成した研究計画書に基づいて、ゼミ全体及び個別での議論を重ねるほかに、実験・調査の展開、データの分析、校内向けの論文執筆、そして活動発表会のための発表資料の作成などが主な活動内容であった。

質問紙 学習動機づけの測定として、西村ら(2011)を用いた。本尺度は、自律性の程度に着目し動機づけ概念をとらえた自己決定理論(Deci & Ryan, 2002)に基づいて作成されたものであり、内発的

動機づけの程度が高いものから順に、「内的調整」「同一化的調整」「取り入れ的調整」「外的調整」の4つの因子から構成されている。「あなたが学習する理由にどのくらいあてはまりますか」という教示文の下で、それぞれの項目に対して、「とてもあてはまる」～「まったくあてはまらない」の4件法で回答を求めた。加えて、「高校におけるカリキュラムはどのくらいあなたの学びに役立っていますか」という教示文の下で、本校の探究活動に対する評価について、「とてもあてはまる」～「まったくあてはまらない」の4件法で回答を求めた。

結果と考察

各因子について、対応のないt検定をおこなったところ、「内的調整」において介入群のほうが対照群よりも評定値が高かった($p < .05$)。他の因子においては、いずれにおいても両群に有意差は認められなかった($ps > .06$)。生徒たちの探究活動に対する自己評価がこの効果を媒介しているかどうかを確認するために回帰分析をおこなったところ、「内的調整」において完全媒介が認められた(Figure 1)。しかし、他の因子においては同様の媒介は認められなかった。

これらの結果は、探究活動をおこなった介入群のほうが対照群よりも探究活動が役立つものであると認識し、その結果として内発的動機づけを高めていることを示唆している。

本研究では探究活動終了後の質問紙調査のみ実施されたため、探究活動が、動機づけに影響を与えたのかは不明瞭である。この点を克服するため、現在はベースライン期の質問紙調査を含む研究を新たに実行中である。

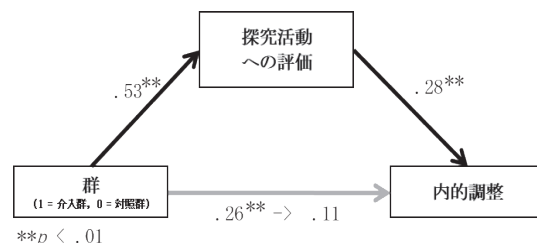


Figure 1 本研究における「内的調整」の媒介分析の結果(数値は標準化係数を示す)